次代を開く
女性起業家たち
Case Study 1

第4回 DBJ女性新ビジネスプランコンペティション
「女性起業大賞」受賞

## 矢島 里佳氏
### （株）和える（東京都品川区）

# 日本の伝統と先人の智慧を次世代につなぐ

株式会社 和える
代表取締役
矢島 里佳氏

「バブル崩壊は、おカネだけで人間は豊かになれないことを教えた。だから、株式会社ではあっても『足るを知る』ということを考えなければならない。和えるは右肩上がりの急成長は目指していません。ある一定の成長を遂げた暁には、緩やかな丘を登るように、毎年同程度の決算額でもよいと考えています」

**（株）和える（aeru）は、代表取締役の矢島里佳氏が「日本の伝統を次世代につなぎたい」との想いから、大学4年時の2011年3月に起業した会社だ。翌12年には、子どもたちが幼い頃から日本の伝統に出逢える環境を創るべく〝0から6歳の伝統ブランドaeru〟を立ち上げ、日本の伝統産業の技術を活かした赤ちゃん・子ども向け日用品の販売を開始した。その後も、日本の伝統や先人の智慧をさまざまな暮らしの場面で活かす仕組みを開発しながら、次世代につなぐための取り組みを進めている。**

## 伝統を伝える ジャーナリズム

もともと、食材に調味料を加えて味を絡ませるという「和える」の意味を矢島氏は、「異素材同士がお互いの形も残し、お互いの魅力を引き出し合いながら1つになることで、より魅力的な新しいものが生まれること」と説く。ユニークな社名に込めたのは、「日本の伝統や先人の智慧」と「今を生きる私たちの感性・感覚」を混ぜるのではなく和えることで、人々の暮らしに伝統産業の技術を活かしながら、先人の智慧を次世代につなぎたいという想いだ。

矢島氏は、中学・高校での茶華道部の活動を通じて日本の伝統文化の魅力に惹かれ、先人たちがつないできた智慧や暮らしのあり方を将来に残したいと考えるようになった。その後、大学時代にフリーライターとして週刊誌の連載企画を持ち込み実現。全国の伝統産業の職人と出逢い、さまざまな技術・素材に触れる中で、モノを通して伝統を伝えるジャーナリズムの世界に挑戦することを決意した。

ところが、「普段の暮らしの中で子どもの時から触れることができるような伝統産業品を生み出し、次世代に日本の伝統をつなげていきたいと思ったのですが、それを叶えられる会社は見当たらず、その結果、自ら新しい仕事を生み出すという選択肢が自然と湧いた」と言う。こうして2011年3月、大学4年生の最後に矢島氏はそれまで抱いてきた想いを実現すべく、起業に踏み切ったのだった。

## 次世代につなぐ取り組み

これまでに立ち上がっている事業は7つある。その中の1つが空間を通して伝統を伝える〝aeru room〟事業だ。具体的には、ホテルの宿泊時にその地域の伝統・文化を感じられるように、伝統産業の職人の技を活かして部屋の空間全体をしつらえる。2016年以降、長崎、姫路、奈良に〝aeru room〟をオープンしており、2020年には京都でも開業する予定だ。「日本にはホテルがたくさんあるので、私たちが地域の歴史や伝統を伝えるお部屋を作り、新たな価値を生み出したいのです」（矢島氏）。

他にも、職人の技を活かして世界に1つだけのモノを〝お誂え〟（＝オーダーメイド）する〝aeru oatsurae〟事業、お気に入りの大切な器を伝統の方法で直す〝aeru onaosh-i〟事業などが進行中で、和えるが創業20年を迎える2031年には、約10以上の事業を立ち上げる予定だ。一見するとハイペースな印象を受けるが、矢島氏は「私たちがやりたいことを一方的に事業化していくわけではなく、伝統を次世代につなぐために、社会から求められることを着実に見極めてから事業化していきます。この先も三方良しで事業を育んでいきます」と話す。

## 千年先も生き続ける企業

矢島氏がDBJ女性コンペで大賞を受賞したのは2015年度の第4回目。審査では、「子どもの頃から伝統産業品に触れ、その魅力を知ることで伝統産業を通して、豊かな暮らし、かつ職人の雇用も創出するという社会的意義のあるモデル。入念なマーケティングと伝統工芸産地での丁寧な仕組みづくりなど高い戦略性とその実践における戦術性」が評価された。

受賞後嬉しかったのは、DBJが地域や地域金融機関と共同で行うセミナーでの講演機会が増えたことだという。「起業家にとって一番の応援とは、自社の社名を広めてもらうだけでなく、どのような社会課題にどのような仕組みでアプローチしていて、そこに人々がお客さまとして参画することによって社会の変化にどう関係することができるのか、という深い所までお伝えすることだと思うからです」。講演を通じて、矢島氏は和えるの存在理由を伝え、起業を目指す人たちに共に新しい時代を切り拓こうと呼びかける。

矢島氏が目指すのは、100年、1000年先も健康で生き続ける企業だ。そのためには、これからもゆっくりと丁寧にサステナブルな事業の仕組みを創り上げていかなくてはならない。「先人の智慧と今を生きる私たちの感性や感覚を和えた丁寧な暮らしを生み出し、皆さんと共に『文化経済大国日本』という新たな時代を切り拓くことができれば嬉しいです」

和えるの事業に共感する人が1人でも増えることが、矢島氏の願いを叶えることにつながる。ここはじっくりと、その挑戦を見守りたい。